

**ヒビ**

## 知らせたくない家族の「愛」

白石区支部 皆川幸範

5年に及ぶ闘病の末、家族に見守られて一人の患者が亡くなった。しかし奥さんは、その場にいなかった。いや立ち会えなかった。乳癌の末期の状態、U病院に入院中だったのである。そしてその二週間後、奥さんも静かに息をひきとったという。中学生を頭に、三人の娘さんが残された。癌に両親を奪われて……。

昭和63年2月、U町で消防士をしていた彼は、職場の健診を札幌で受け、胃バリウム検査で胃角上部の異常を指摘され、U病院を受診した。精査により後腹膜腫瘍と診断され、当院紹介入院となった。来院時心窩部に手拳大の腫瘍を触知、血管造影等の精査を行い、膵癌と診断された。

家族への術前説明（奥さんと患者の実弟へ）は、かなり大きな進行膵癌で、門脈を巻き込み狭窄を来している状態、切除不能であれば、6カ月も難しいかもしれない、切除可能となった場合で1年位あるいはそれ以上の予後が期待できるかもしれない事等、検査資料を提示しながら行われた。

家族からの希望は、何とか切除して欲しい、切除できても本人へは絶対癌とは言わないで欲しいと言う事であった。患者にはやはり検査資料を提示しながら、膵嚢胞が大きくなって胃を圧迫して来ているため手術が必要と説明した。

昭和63年5月9日、早坂、飯沼、西村、皆川の当院外科スタッフ総出で、16時間に及ぶ手術により、無事膵頭十二指腸切除が為された。

術後経過は良好で、6月23日退院となり、その後月1回、私の外来へ通院しfollow upが行われた。職場復帰もなり、順調に経過して行ったのだが……。

平成4年夏が過ぎた頃、腰背部痛と急激な体

重減少が見られる様になり、精査にて大動脈周囲の転移再発が認められた。

実弟には、ついに転移再発が来た事、今後は徐々に状態が悪くなる事、疼痛に対する治療が必要になる事等々説明したが、この頃奥さんは既に進行乳癌に対する治療を受けていたのだった。

年が明け平成5年、MSコンチンによる疼痛のcontrolもできなくなり、入院となった。栄養状態も悪化し、肺炎も併発した。種々対症療法が為されたが、2月10日永眠された。そして、後を追う様に奥さんも……。

U病院では、彼と実弟に奥さんの病気について詳しく説明されていた。夫婦お互いが相手の病状を知り、告知しない様希望された。不治の病（二人共かなりの進行癌であった）を知らせたくない家族としての思いやり、家族愛、患者の知る権利と医者への知らせる義務、病期にもよるが、癌患者やその家族にムンテラする時、いつも考えさせられてしまう。早期癌の場合は、全て患者にも説明して告知する事もあるが、相当の進行癌や非治癒切除症例等の場合、どの様な説明でどの程度話したらよいのか、悩んでしまう。

最近では、TVや新聞等でも詳しく癌についての情報が紹介される事が多いと思う。別の患者で直腸癌肝転移の場合、肝動注療法を施行した。上腹部皮下にリザーバーを留置したのだが、患者が「昨日のTVでこれと同じ様な事をされた人が出ていて、その人癌だったんだけど、私も癌だったんですか」と突然聞いて来た。奥さんと、絶対癌とは言わない約束だったので、「この方法は癌の人だけの治療ではなく、肝臓がかなり悪くなった人に、直接肝臓に薬を注入して良

くするんです。」と苦しまぎれの説明で納得してもらった事がある。

又別の患者では、逆に奥さんから医者の方より告知して欲しい希望があり、早期に近い胃癌であった事より患者に病理結果を話した例がある。術後経過も良好で食事量も十分となり、退院も近いと考えられていた頃、ある有名人が胃癌で亡くなったとTVで放送され、それと同じくして嘔吐、食欲低下、体重減少を来たしてしまった。我々の説明に、頭では分かっているも気持ちの面で整理できずに症状を来たした様である。1カ月程して元気を取り戻し退院されたが、奥さんに「やっぱり言わない方が良かったのでしょうか」と相談され、「一時的な症状だから心配無いと思う。充分理解はされているので、これをのり越えれば元気になると思う。」と話

ただ、その様になってくれてホッとした。

家族にとっては、告知してもしなくても患者を思いやる気持ちは同じであり、又心配（再発転移の）も同じと思われる。その間に入って、時には「ウソ」で通しながらも信頼を失わない様に治療を続けなければならないと思っている。

人それぞれに考え方や感じ方も違い、どの方法が一番というのはいないと思うが、患者と家族そして自分との人間関係を考え、その場合に応じた話し合いをしていきたいと思っている。

癌への恐怖や死に対する不安が解決できない限り、知らせたくない家族の「愛」は無くならないと思う。

何かまとまりの無い文章になってしまったが  
終わりとしたい。（札幌センチュリー病院）

